



TITLE:

2 ニホンザル飼育個体を用いた生態学的研究(X.共同利用研究 2.研究成果)

AUTHOR(S):

辻, 大和

---

CITATION:

辻, 大和. 2 ニホンザル飼育個体を用いた生態学的研究(X.共同利用研究 2.研究成果). 霊長類研究所年報 2008, 38: 98-98

ISSUE DATE:

2008-08-31

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/166533>

RIGHT:

イブであった。しかし第1可変域を分析したところ、塩基配列に違いが認められた。また兵庫県篠山および神戸町のサンプルでも異なったハプロタイプが観察された。今後は、これまで分析した第2可変域の分析情報に第1可変域のデータを加えて、地域個体群の遺伝的特徴について分析を進めていきたい。

## 6-10 下北半島脇野沢における野生ニホンザルの個体群動態と保全のための諸問題

松岡史朗, 中山裕理 (下北半島のサル調査会)

下北半島のニホンザルはその群れ数、個体数とも近年指数関数的に増加している。その要因を検討し将来予測をすることを目的に、初年度に引き続き調査を行った。脇野沢民家周辺の合計個体数は249頭(前年度232+α)うちアカンボウは38頭だった。A2-85群とA87群の出産率は48.7%(前年度36.3%前々年度54.8%)であった。アカンボウの3月までの死亡率もA2-85群、A87群共に0%と低く、依然増加傾向にある。

A2-84群は2007年3月に68頭(アカンボウ9), 47頭(同8), 9頭(同2)の3群に分裂した。3分裂群の遊動域は現在、分裂前の遊動域内で重複しており今後の各々の遊動域の動向が注目される。A2-85群も現在82頭となり、分裂の可能性がある。農地の利用度は、A2-84群とA2-85群では依然高く、A87群では低かった。この地域で、オトナオス5頭、オトナメス2頭、ワカオス8頭、ワカメス1頭の計16頭が民家侵入等の被害で駆除されている。

## (2) 自由研究

### 1 ニホンザル新生児における匂い刺激によるストレス緩和効果

川上清文 (聖心女子大・心理)

筆者らはニホンザル新生児が採血を受ける場面に、ホワイトノイズやラベンダー臭を呈示するとストレスが緩和されることを明らかにした(Kawakami, Tomonaga & Suzuki, Primates, 2002, 43, 73-85)。本研究では、その知見を深めるために、ミルクの匂い(Lactone C-12-D)を呈示してみることにした。ニホンザルのミルクではなく、ヒトのミルクの匂いである。

本年度はメス3頭のデータが得られた。第1回目の実験日が平均生後10日(平均体重528.7g)、第2回目は生後17日(平均体重562.0g)であった。匂いを呈示した条件と呈示しない条件を比べた。行動評定の結果では、ミルクの匂いの呈示効果はみられなかった。コルチゾルの分析を急ぎたい。

なお、今年度もミルクの匂いは、高砂香料で合成された。高砂香料に感謝したい。

### 2 ニホンザル飼育個体を用いた生態学的研究

辻大和 (麻布大・獣医)

本年度は、種子散布者としてのニホンザルの特性を把握する一環で、プラスチックビーズを採食させて排泄までの時間を調べる予定であった。しかし、予定していた実験を実施できなかったため、2007年5月および8月から12月までの計6回、宮城県金華山島で調査を行

い、ニホンザルの糞を採集した。それと並行してこれまでに収集した糞サンプルの分析を行った。

サルの糞からは、ニガイチゴ、ソメイヨシノ、ヤマボウシ、ヤマウコギ、ホオノキ、クマヤナギ、レモンエゴマ、ケヤキ、シデ類、アオハダ、カマツカ、ウラジロノキ、オオウラジロノキ、クマノミズキ、サンショウ、ハダカホオズキ、ガマズミ、ノイバラ、サンカクヅル、マツブサ、ヤドリギといった多様な植物の種子が数多く発見されたが、これらの種構成や種子の量は年次的に変化した。

来年度は飼育下のサルを用いた実験を実施し、その結果と本年度の結果を合わせることで、種子散布者としてのニホンザルのはたらきについて考察を加える予定である。

### 3 同所的に生息するサルとシカの種間関係2

揚妻直樹 (北海道大・北方生物圏フィールド科学センター)、揚妻・柳原芳美 (苫小牧市博物館・友の会)

本研究では個体追跡によるシカの行動観察から、ヤクシカとヤクシマザルの間に見られる種間交渉・種間関係について定量的な把握を行った。

屋久島西部地域で、人付けされた野生シカ4頭(メス2頭・オス2頭)を対象に、サルが活動する日の出前1時間から日没後1時間の時間帯で個体追跡による観察を行った。対象個体の行動は2分毎に記録した。また20m以内のサルとの近接の有無も記録した。さらに、対象個体とサルが交渉を持った場合には、その事例をアドリブサンプリングした。2007年6月から11月にかけて、合計約95時間、約3000回のシカの行動を記録した。

シカの観察中、対象個体がサルの20m以内に近接していた時間割合は8%であった。これは昨年の値(9%)と比べてほぼ同じであった。シカは総観察時間の25%を採食に費やしていた。シカが採食した品目の中でサルが供給した品目(サルが落としたと思われる食物)の採食時間割合は11%であり、昨年(4%)と比べ多かった。サルが供給した食物品目の中ではヤマモモ・マデバシイ・モッコクなどの果実・種子が88%、ウラジロエノキ・シロダモ属などの葉が10%、サルの糞が2%であった。なお、食物のやり取り以外のシカとサルの直接的な交渉は特に観察されなかった。

### 4 野生ニホンザル・オスグループのクルミ食に関する研究

宇野壮春 (宮城のサル調査会)

金華山島の一部のサルはオニグルミの硬い種子を歯で割って食べる。硬い種子を歯で噛み割るに年齢やクルミの落下時期がどのように関係しているのかを2007年10月と2008年3月のそれぞれ10日間調査した。対象となったのは10頭前後のオスグループで、結果、7歳以上をオトナオス(N=8)、それ以下をワカモノオス(N=3)とした場合に、すべてのオトナはクルミを採食できたが、ワカモノで採食できたのは1頭だけだった。オトナは平均で1.3分に1個(109/137)、ワカモノ(1頭)は3.4分に1個(23/79)の割合で採食し、オトナはワカモノの3倍の速さで採食した。また、オトナは拾ったクルミのほとんどを割ったが、ワカモノは数個に1個の割合でしか割れなかった。クルミを割れないワカモノは、採